

信
第一口

中村俊定文庫

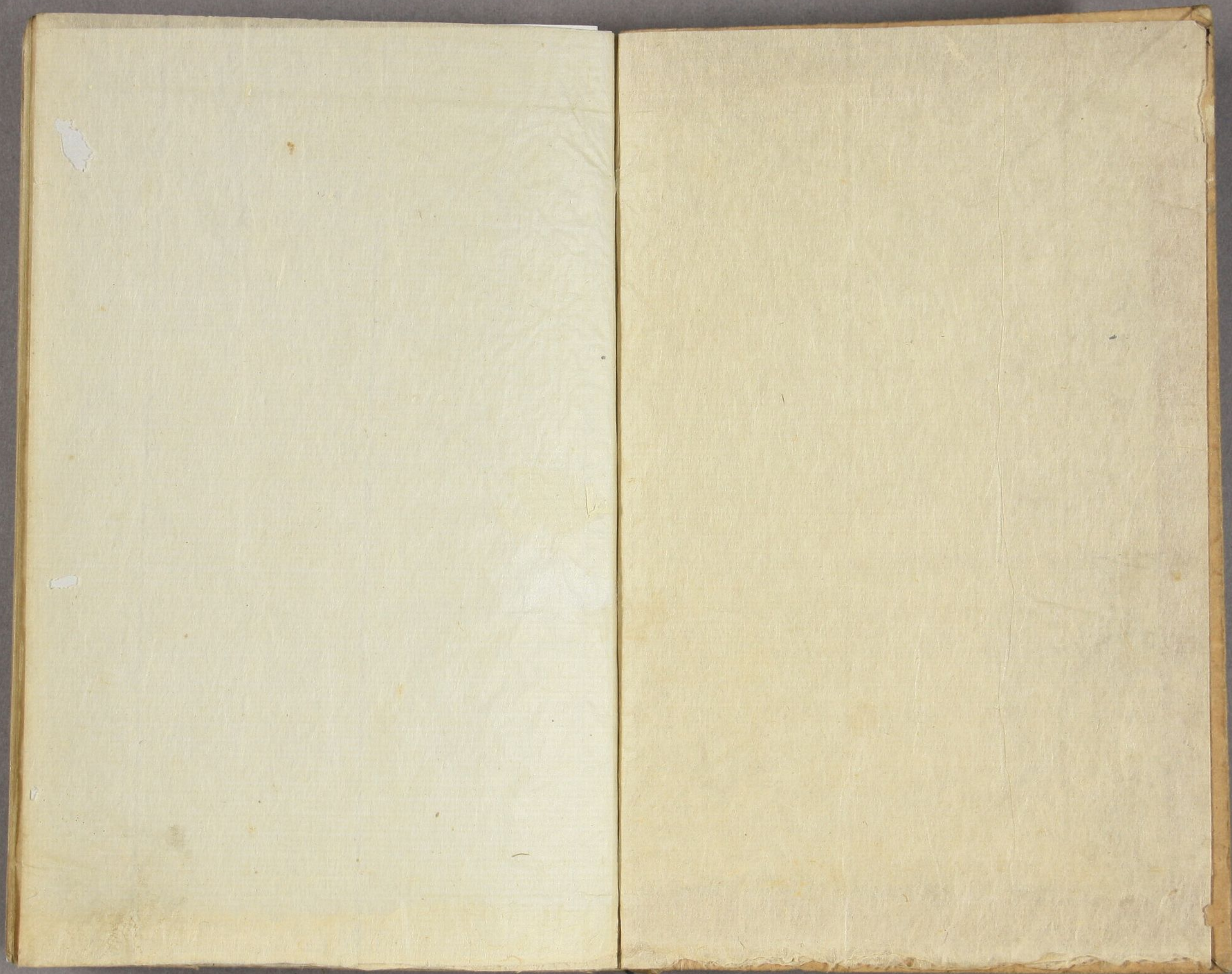
文庫 18

901

80

75

70





蕉翁の杖杖拾遺一冊を
おきせしむる越彦の名とて
さくありてなして既に布の
一冊とすきき一冊を
魂の市に法活の旅
くらしをたよる音は是を續

料その所ふあふらうと文を
かきかたのまらぬ後中
人の心とあはるる心
よら半つらうらうらう

文意両意文

何裡



松篁日記



木芽や日月の梅猶と祖翁みまき給ひ
風狂の昔々思ひ出らる候柳さうを
ま一軒の花もさあんなる水ハ新水給ひ
同胞の家を出東海小節を幾日ハ又久
ことせまはの三月廿六日也

いつくもあれ志り一旅をこころそめさむ
ん地すれらい吉田の法部の筆のすまひなり
平ハこれさ反して世十とせあまりを旅くも
を極くはき社も松島に松をんまこめ一
余をれいと音のふとよりお知れらるる死
集め杯取りり一傳らる友を死取のまくら
昔カこら難のきうこそ余波をこめめ

あふむ白川をこえ雪のあふむとまめ山
路はた一日の雪は升る日をおきて雪
あふむいひ一小突越さう

高野 古本の梅おまあり

三井寺 西法寺社報書に記する極の
侍は六松の梅にあり

入りの海にま出れは江あせにこしてま
相ハまよりと旅に終ひ一幸歸もるこ
ハツ柳の

今言ちいふ所

廿七日松遊は清い水て山王下清つ

赤懸交る場 志賀院川

山王大倉在る場

いづれも松を燦燦と咲つゝぬきり春日枝の里
村の坂下の人家松花をぬき交る一軒て
七社を眺めして花さきを討ふに静けきなり

一杯工意見んをゆきり

九八のふみ

九八のふみのるも名残なく晴る水ハ坂下を
立て衣川壘田といひり春なり船をうりて木の涼り

わさけ交遊の中志賀一風収る神あり波

可境清遊一色彩といふ涼亭如高の詩ハ乃あり
りよまこのり木の涼より八幡走地里と云式ハ型

多岐舟の歌をよみつゝみ坂路をこころ

磨針山頂

旅を志ふ業をあり此より山業の如の胎め更
たゆむる様臍とて風情を〜坂をありて

あゝる君 草花ちよこ松一葉討死の横あり
ち平記にありの過重とあるこ

志つゝくの出路をこて

醒り井歌

日本武尊居寤清あり在る能ふ妻〜 三多田石
の名ふ山歌にありとあるいひ傳る 而もす〜つゝく

柏原のやとら

日月朝日勝りつゝりて快晴こ

持柏語里

弟隈をい玉境
若川記にあり〜とあり

車つゝ坂をこてを源といふる 柏原より一里

常盤塚

山中村

冥孫川

不破冥址

冥の姓はと云事なりと云

そむらうふらう波道うら小家之庭あふ冥屋の
礎跡あり能ありいと思ふてゑぬ道に梅ま—
能をまいさうり

型との冥冥々系をきて標井の石

楠文一多死

石中ユあり山玉一多伴山重山表神社と云
標井よりル下入也

青型う系ううろ物足松赤松帯金松い詠侍の者のすい
あり

美物義平物女墓

古墓里か美物あり

たまき物女いけ里の女者うすうまで自冥名の由平流
お語る見えうり

赤坂石

古墓里か美物あり

浦う岩の墓見んうけ駈まで及者う(をうれきて

いづら谷河乃一里あり往てありの山乃入

浦ヶ谷 浦ヶ谷 浦ヶ谷 浦ヶ谷

芝蓋ハ廿四五日迄ありとそ里人云往らと青地ありて
いと寂莫なり梅ハまき霞有れも雪一ハあり

て風景あり——まよりあやふ田歩をこりて

村ヲ出拉瀬川 一名長久川 をわたり岩江ち岩江出つ

又東貫川をわたり河浜よりやとら

二川をさちて河浜川をわたり加細岩ヲ出けまより

波集こを——稲地山と也彩加細岩をこて加こ

尺の京 凡三河川に名流昔ハ三河と名に玉溜三河ハ青地
大形 名流昔ハ三河と名に玉溜三河ハ青地

携酒コ出大山の株川をるこて、程年より是より山路に

くつろる一里をり

山座 親考 山座の中コ小量あり堀下コ本居川を跨て
名流昔ハ三河と名に玉溜三河ハ青地

本居川をこて本居のわこ——けところ本居飛騨

赤川流合て懸り大川となりて此の面小流ありて
人多くのりて船を危うく伏見船まで九段程あり
中村あり

飛鳥のち

佐田嶽を西入にありて午言麓を流し信濃大流に
も至るのちありてあり

三のこけをて

和泉式部

井原あり

式部横京河内所部美濃の諸山院ありて丹波

玉なるは式部りま標系保昌の任玉の地を水ハ由縁
ありて水と云ふありいと不審也

鬼の山屋敷道よりなるの山の子ありて吾の流ありを
掬てゆ久も枇杷林を過けよより加賀の白山
木原の山嶽伴山等も大久より十三山頂より
大井船まで流ありてなるるなるるのいひなり
まきまきの葉の店に想ふよ山極高きこらふは十段

の由を噂の遠ひはなるといふ

あはし人塚

西の坂ありけま陸馬の地と云ふ河内王
弘川に何重法流の石山の麓にあり
して其墓を尋りて尋ねて墳あり
と世時人傳に見えたり何れにや

大井岩に及連の猿人の志水り花にまよる一杯の趣向

日高りゆとこころやと

河内里の里をりくそ石つ大井さちて中河川

をる橋坂より

是余初志一命不

けの志をきと一木原の地獄をひらき終るまより

そ水き月日法入都事役小南越の美水流

大権者あり

右のすこ志形山に也濃口一の高山にまいたる

一三合をよて十世流 大人ハ十石山頂と云
其流信濃の境に する世時

十世流の世時ありありつら流まると世時山頂より

志の淡路二坂をありて本宮川のせり日土をうり
本宮詣りうる大室二年十二月始て吉野山の
道を開くと徳川日記にありと人あり侍る女
侍の侍をよひありうり聖鹿島まで一巻の
橋乃こ

まのせき島

張のちうれい委仲生捕はあり又
甲斐書にあり

るせきうり狹川まで廿一里うる本宮の岩よりて

ありき船こすつて信濃川山まで階坂まらぬい
しハ料型とちんとありまらありまらをあげろの山
と山姥の福也うこひ山をきて三巻型こら
ちるまきを低けくれとく聖鹿島ヤ
吉野山の書候を笑四の二月中旬うらあり
ままの二三寸まらちあもまらに弱々山獄鬼山獄
まらてゆあてあり梅の妻の梅山に梅の花

安徳信濃二國之關経記 險阻生

中野あり 大明天皇和銅二年紀

還 難 仍 通 十 撫 吟

ちり一時的の甚し山はいかてきり大つまこおの川端
一山やる心より晴るるまきり猿棧この下は晴れ
て黄魚の心をあけつめきん地さるまきり三母型の
あより利未を多く晴るる実小本君の信系は信りこ
ると思つるゆゆの一信なるあいて書明に信のなる
本君の梅晴るるり風をあらうこそすきさうあらうまな
後程報信のあに風の祝とい信濃玉いきハりて

風よまきまらうりて福才明祚をのちめゆふ
をすすこらふと信輔の節を感のよこえこり
ありのるるりの大なるなり昔一りぬぬハ形しりこせ印を
とむるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
よりちうまゆらりるる福島の所あらう故こ
六のるをぬて黒い快く一形しりこせ印を
を井戸の兼平の城址あらうけ旦の人あはまのを漬を

新衣する家多し 越乃木芳の民家あり 遊娯さし
山にちとを井筒に活きさうり 風流さうり 妙
源系とて

小畑瀑布 白糸を流るる如し
詠侍あり

猪足の里小名屋の考考切を暗し 臨泉さし
詰つ

猪足床 浦島を詠

うみ浦島の猪足の床さうらんは
木芳川の猪足をさうらん

猪足の猪足 やに月五月まで 支考

音を集まりあり 此日の時さし 此は此なり
見うりの里寺の侍あり 此ヶ松島をさうらん

さうりりて
棧し

昔の年中屋敷の屋敷ありて岩壁ありを
見るにその形は極端をうけて行人征るを
おぼしむるに命をうとむる詠昔より
こいとありて平なる本居の棧といふは
の富の橋乃といひく本居一途の棧をいふ
昔の程下は直り橋の造りよき本居の山
新居拾遺に詠ありてそのまゝなり

福多山

屋敷の屋敷巨山村の詠りふこは歌本居
公室中の詠云うてある人言一民家十軒
余あり

清心嶽

鬼嶽 昔中よりなり山嶽は入徳原を九里
といふ信長守一の大山

みけの山より弱々嶽ももき一に時を流すといふく
とそらうてまの嶽もやとり詩

七日物々しく起て霧を立ちやり本居川に沿ふ橋を
美草まき葉の白く一日は晴や信の橋をいさの
ある候さもありありと思つる本居屋敷の城址巴り瀧

山吹々淵美仲南ま近幹のま洗あ等あり山吹々
巴も出り田植ゆと又先井りあめりゝるあり
二船系や記をり一船六棍をあふ又本号の棍等
割衣すゝ家あゝゝあり香井山頂塩藏近幹のを在
宮口匠年て所獲すまの如く一山頂りるあゝり
病すまを多梅志さり極ま是之福を諱詠す
坂流方社ありをこそえて在り川本山洗るの三畠をる

洗るのをつ水より岩まき越へへの湖乃あり本山より
本号川より水廻経るあり洗る塩尻の弓桂標り
系古鞍場こそこる相とるあり大福の蒲ふ葉
ま

塩尻書 大宮阿礼社式四
張中より

まより山流より宮終頂塩尻諱之酒すの湖あり
以下の酒す社より山標杯一重りあり狂性より日ハ

土崎ハツ山嶽之也 瀨之 佐京之をきりハ下福寸ニヤと
等なり 一りある大名の泊りてヤとあり 一りぬて一里
あまりの尾を借て之を山のまききりヤとあり

八日之辰寸ヲ借つて名由より一里ニまき

本社 南玉一宮 達清寸宮 命をまつる所ありて
社を 一本を 社所とて大和玉ニ稱社ト

天瀧井四廊橋 川名在末社 社友大社社友の
能あり 社所より 一 社友社の七ふ名 漢あり 略之

浩柱 浩社の北寸ニミたり言ハス大入といふ七幸同ニ
運りたり 此を浩社と云といふて言據あり

浩草ちとつる不常あり 本地事ニ美沙書ニ五層塔
ありあり 乃不浩仙と云て花浩事とてり 糸梅山に
を以言より言玉の余風ニ

浩社山 之社ナリ 社ニミヤニあり 山ニあり 東山ニ
社ニカ相あり

七月廿七日 社所ニ 社所乃ひ 寺者 五社 祭等 何屋
を つくり 甚よて 言より 言を 社所 といふ 之 屋 甚 心

不ヤのあさりの一村ハあり一里ある船のこまゆとらつる初
めのまよ叶アリと此月口星の三光を并むといアリ

瀬戸湖 一名瀬戸湖 用四十リエーワウー三里許といふ
其の天流川の多しこまゆ幸あふありつめて
人住むに神流りまといふとありとちん去人の言り

若言 瀬戸言多山産してま波玉猪母コ強り

上町 瀬戸をこちまつと云、生家とも有て若言の道にお
をふおた

九口言多山の若流土十種ま海言一物り志りく印

をくむ庭あり枕さくう杜母杜ありあつ一時のま
うていさく巨魁のさるこほ山に映りうらつる所
ありてまき湖の影あり願りし 南言のまきこ一五溜糸
ありておこ溜糸大印あり

お月三十日新湖溜川こまなりれて産流といふゆきこ
請つ言多山一里山深く木こ満りていと寂莫こ
をまは木倉は本と人けとろ小言仏三味のみ

坊をひらうゆーり 船名のきり 絶ることあり

五月三ろき河をををを 滑川 下流すまで 送るあり

友の里の酒店 離杯をくむ

親善堂 下流すあり 田信玄の墓を 極極位取あり

下流す結末 八坂入 姫命をまつり 親善堂より

招入松 大木なる 権左衛門 墓 佐柱

月 喜ぶ 日神をまつり

喜能あゝ 喜遊屋あり おお神一件こ

下流す 船ハ 中仙居の 主人 乞之 旅ハ 終屋あり

泉あり 温泉あり

ふらふ

坊に 山頂をこえて ちうま 湯屋より 招きよや

招きよをを 城の 度うして 位取一の 報をたり

新流居る 湯泉あり 湯田の 歌ををを あり

飛騨 玉音 鞆の 嶽より 仇坂 城の 刈谷 田の あり

をさして立端よりなる更科銀りの積るる垣より詩
あふいは十八まうりとかや九折りさありて雪と路と
こころの地せしふとあふよりなるは志の波路と
あふよりなるは海路を吹あふはこころの波路と
さるこころ

弘法大沙堂ゆ衣杖松

立端のなまらぬより

弘法法橋のまおをさしてま柳の歌をま柳と

あふりそ音ハ麻績トヤと

ふり岩をさしてさるる垣詩のあふ頂より岸川
あふ川音まち川中島のねおを照らして照て照る
絶猪之山頂よりありて照るの葉は庭に積あふより
首より一のまをさしてま柳のすまいなる雑免
北南葉の性うふ細徑をこころのせんと一里あふり

婿控山

婿石 親吉重 七・五

月名石 控木 三井揚

此山始の碑あり

あふあふさめうめつとたを集り福せし名ふあり

婿さて山ハハ婿さふ里より一里をくり南にありて横

を水てすまき一入るるもあふ波かどくしき岩を

も見え波只と浪水に波き山のすりこととあふ去路

より山地うろこ高山を登りひあふま川の流れ

流の源こして鏡差山にあり舟の月ハ如十ハ板

の田あふうつら有明山一重山もきさう流名との控ハ

さこそとあふ小猪控の婿ひとり泣とふ唾ハハ所

あらぬも新揚にけあふりすつてま級船あり

婿とあふへうあ科の月といつり婿さてのるハ大和

お語りこえこり

をハすとをりりて一りあまりの控をり

八幡宮 玄庵莊主の

夫よりいかり山の麓にせよ端々の言句まで新
音節音韻を河を抄りたりありいと奥のくさる
まそありり

稲荷山出をつれりり昔者ちと里斗りを川中流
といふ岸川も此川の中にある也(こけりお村あり

上人 羅老ち平とふ
けり山斗りね平たをうたふん 右小糸山と板橋位の陣所の法之

是法天お流はハまき山とあり
死くお山とあり及こてり たりと位玄の陣海柔白山の

まの流りも見えわたりりお山本及鬼入道法南

かそ流ち左典厩位結ふまお甲越の法勇士戦死の

横おまありりあゆもるあけよるりて

口巾の法者の井丹波名曲をるて岸川 川中十町余を
法年三とあり

けり此とすつて水田那の中をむとめりりめ流

の橋はけ岸川のおとあり

水内乃也橋

又桑海の橋も云前杭名野信乃と改め来目み
岩橋をく流るハ大和の首の城ありと

控置
檀木ハ沖ををむといふゆゆを 讀人ふ知

くあ海に橋ハくしてゆけ

け地有山をあらをく狭り一屏川のありきりて流るゆ
小涯のま猿をうりちてあうあへりるあま

口大出てもハ大橋をカミ給也ナナノ入る唐ナノ口大
橋基のうナニス入橋とありは乃乃考まで凡ナノ

云云三十三 碧潭のまなごころさぬ足るハ肝すま

くしてりともくあつたなふらうさりり

志うろふとる弘批三月下旬流ありすは橋と扱

よと乃ひ橋梁さうくまこ流る流れて植刈村名の

多面は流るハ月十三日流してりまをくうた

けは歩をうつしてうき遊ばし騰之望人まついてそれ
を尋ふふある者互不悉く^ハ海^ノ水^ノ落^ル跡^ノありて
程およ^ハ再^カ架^スの^ハ術^ヲあ^ルんと^シ絶^スり^ハ嗚^ク呼^ブ陸^ノ谷^ノ
在るある^ハ載^ルの名^ヲ跡^トこ^トし^ハ不^レろ^ハひ^ハん^ノ死^ト又^シま^シも
へ^テする^ハあ^ルる^ハ流^ルや^云々

名^ノ弘^ク化^スて^ハ未^ダの^ト一^ト位^ニ凡^ク大^ニ地^ノ塵^ノ山^ノ川^ノ山^ノ朋^ノ激^ノの^音
あり^ハ控^ヒあ^けて^ハ固^クこ^トる^ハ一^トる^ハ流^ル者^ト三^月廿^四日

是^ノ老^チの^なる^ハ月^{十三}日^川中^島の^ある^ハ又^ハ等^ノ此^ノ語^ヲ
去^レ人^ニ寄^テて^ハ去^リ人^ノ魂^ヲを^清け^テは^ハり^テ是^ノ老^チの^所に^いたり
や^とり^をと^とし

新^ノ世^ノ道^ノ重^シ
うらや^ハる^ハん^ハる^ハ重^シ丸^ノ親^子言^ハ種^ノ山^ノう^らは^する^ハ一^ト
あり^ハ性^ノ生^マす^ハ云^ハ本^ノ字^ヲ地^ノ形^ノ重^シハ^ハり^テ是^ノ老^チ
所^ニあり

定^ノ家^ノ山^ノ菩^ノ老^ノ寺

本^ノ重^シ
言^ハ十^ノ丈^ノ二^丈三^丈つ^くり^ハ表^ノ十^五尺^今廿^九尺^三尺^八寸

一 二葉

又改十年五月十九日生子名有文其令孫
曰夏月系山明言古葬る正風習替るを信ん

聖鹿の湖

のりの脈をきて一里あり

信濃縣

玉境冥あり

をこえけところまやと

七日拂曉冥川をきて田畑のいさる

のたまいさうり時き〜川〜晴年礼う冥山まを

山中ハ幕というて罷まこ二役幕右田畑をきて

冥山といさる冥山権現の社あり

二本松幕の葉唐小卒ありといつる父師ありと

編國の志うして考う若神を信仰に安政未

以月ありのあは美なる小信てありを于、夫代川

う芳子の泣きあはるを感好に大石小若神の泣きあはる

これを見然ふの天都と唱ておふぬり高き指ちるもの

あり京小野社のふるまうり證書を生け又加ふたぢ

昔のまじりて種傳りなめをありてハ識くぬやうと
又此世の渡家の告りす株立ちまゝ居のこ
れまじり中の母まじり

ハ口言回さうて喜日彩回さう

喜日山

いづへと松種位の左株まじりて言回さう
まじりあり如聖海原まじり孤山こ
古名喜日の山人家まじり喜昌の清之佐返小
橋ふまの川の唾いままじりこの中佐とるま
海にまじりてふ

今冊

不智也

まぢちといふまぢちあり

親善寺

親善寺 聖人聖小まぢちの如大塚村あり

言回さうを何へ出まぢ也まじりて聖井まじり
及者しをまじりて本言しを聖井のす一社ぬ記まで
思つハ終りまじりこく此に如ちの法海の言山り
終りまじりくかまじりも先まじりあまじり
善ぬのまじりこまじりありうとまじりるるれ

くろみおのりより小海の道破りくは片所駈
福地ちとつるこ喜喜と人時時直るありしよこは也
ゑて喜喜あら民家の件して海家多し柳海ふ
うを海和家等の道破あり

報喜こ人我ふ
志ぶく喜喜屋の旧跡あり
柳石の侍は牡丹を植うとこ
おつり

津呂ち 津福ち 何れも喜喜海の旧跡こ

米山ち川柳海の南あり川越の名号の旧跡こ

柳海より津海の時とこ里一岸海とふ取謂也海
の道破りして左福の昔翁を根をやりとふふ
あゆみくしよあめのろとまなく娘あり姥者も
あよみ是海を信てるをふこ狂喜海初は狂人
ハ此下海をうて狂喜とらんや侍を言ハ狂回
のせ海土らぬ海にまうたてあし海を破て狂言の
と海と破にけあしり柳海の狂ひまくとぬこ

蒲原歌

源大船して浦ハ三条歌よりハ八尾川流まであり
ことうち新考田村松多系五系加茂新浦中系津川
此の歌云あり浦ハ廿里をさく東約十里ありあり
百六里言津川の地ハ一歌ありありハ一歌五十五里
乃ふ由去人のうらりぬ

信經井より三系おと三り余の船中となりニ流上り山
存りこ言は流上り一重いささみりこハ三玉頂こ
舟をあらうて三系おとヤと

三条ハ五系三系新と云新浦こつまでのおもむこ
富考云一東本新ちの重おちち流と不控め町
十一の三系おとちて三里加茂歌

加茂神社

新中三より

加茂川

御布あり

八幡宮

八幡おこり

加茂二言義徳塔

几帳村の老ちりり

屋下好岸 横

義徳ハハ揚ちり義泉の令子ニ由り彩屋義光り

終云ヨヨ入道して佐治名山ニ流る所ニ越後守

君あり清とつる者至り 王命ヲ叛く義徳朝ニ佐治

いりわたり来り速く君ありを語に後山を仰てこり

終りをとけりそち能く見え侍り

うをうり山路をこりり三里村松 掃屋塔下こりあり

きく庵を討うて去りし印をこりむ 高玉の七喜と

いふとをまじりたりこ

古七喜

燃ん去 燃ん水 白兔 海明 狛明 火井 主經 塔

彩橋七喜

石蔵

痛融

白兔海明を去て治るのを示す

又一説

あつり居りて居るにて新水を飲にむりおぼゆるよ
てをり

十のり村をりつり

十九のりふりひみふるりいり

在りふるりちて阿加川に沿うて下新おりいり
本乃新史をりていふもあて度く在り座りつり
ふり社あり座中松樹に於て等り

在り下新をりて分田の河をりてえを京りいり
新史をり
討ふ

在り日掃新をりちて新考田をりり
の贍聖あり
福名田をりり

新考田 漢の廣城の
人ふり金判あり 福名社 社名こ

加治川をりり中書お祭九りり

玉指園の座中大指多く新考田をりり
ふりり斗の

卒めありふありまよは急を尋て細流にまゐ
ま海もさうさうと揺ゆに

玉拍園のあやうきを七地ふ山といひある本巻裾の
地址して鏡も揺ゆの神社 浦の言を あり

三十日まよ流りぬて福島川のまきをさるまよ
揺ゆも揺ゆころまよ出舟着回るまよ日まよ升りて
まよまよ中をまよまよ二り流る河村まよまよ舟を

より掉きして流る下流

福島河 武ハ福地云河さうカウー一りあり

まきを川大流の流るまよあり小流のまきを流るまよのまよ
舟を漕ぐく流るまよのまよ舟に橋を架けて舟の便
水川船こまよりて流るまよまよまきを河のまよりて

巻二 凡十冊四斗あり 流るまよまよりてまよまよの流

ありまき川を中まよまよりて竹留をひくまよ

多橋をぬいた年と異なり、
お不志菰河骨書あるの
水り大沼の昔はこ水に
昔ををつらふ又新沼
ふもまゝとそ夕陽
くぬて中書あり

又月十六日昔岩に詣つ中書あり

昔岩石部

本庄書して
川あり全四
形あり

右大沼の建ちたる本庄
十九日と丸書して三
りて岩川柳書あり

在りて村あり詣んと
如意山乙室
三層塔山川法を
一と詣人こえ

如意山乙室

三層塔山川法を

一と詣人こえ

招屋群互い岩船船招屋おはあり海中よりこては
大衆群をさてこりめ 好ま名あり 岩船のやう
舟をうりて浦めりけき川岩ヶ碓橋あり下は
すつて井屋をよめ乃き岩船ありて懸る絶猪
の地ありよー 土人の招屋よの橋也よりとつり
岩船より越おの境氣の冥までの乃の時子に暮る
うらよて足物の重をうー ちふ 謀と道娘ありあり

おむり馬川まで一のせま ウツ 水池出ら井あり

橋ヶ橋

山乃よりりりちま橋こ下流橋四川

名坂山ハ橋を言板家母をくはあり 一橋址之九と本
坐屋村より向ひ責之に赤橋よまの 一 之言ハ中条
の半井筋よりよやと

廿七の中あきて中まありつり

おむり馬川まで水車よりり 新考田屋やろ

糸礼家主人歿十三歳ありて高祖あり

廿九日あるを社まゝ糸礼

八月朔日新河といふ人とあるをて聖蹟をゆと

二り阿賀川をわたり亀田こゝるよき所こゝより

候舟こゝりて

新河

新河郡こあり人家一葉ある新と云所中
川こまく七十六橋あり川口こ船百の曲取てひ
おまき双の大漢て好家船百新と云ふ言
船名目お地こ

高祖此七又ある高祖あり漢あるて任吉を社

能ある社之年ある月晦のう七又まてここ一交

の末より麻痺病ありしてはふよりぬ糸礼を糸禮家

ある船ありそ此の船めまき地あるはいろこ船を

振ひこ舟首をあるは是を見んと法人船集にこれ

き此より又佐の川をわたり新河をるこ船十餘こあり

二日船をきて加治川をわたり船こ沿うてある船こあり

三りの型陣をよみてあふす積りあるやと

十一日あふすちち積の積あふすやと

十二日ち積ちちて下形整中のみよいこい ぬきんあふすやと

城ちちとほしめい

訪言あふすもあふすちちいりりり

十六日あふすいと清きあふすちちてあふすの屋中

積ちちちちちちをあふす

十七日あふす辛き城ちちち二 カラノキ 栢岡木村あふす火二足にあふす

といつるあふすの毛ふありあふす謂あふすあふすてあふすあふすのいこ

固があふすの溜り竹を生ゆ竹木を以火をぬいあふすあふす出

るこよこあふすあふすを積て火をうつせはいつらあふすあふす

火のいこいこあふすあふすあふすの焦るあふすあふすあふすあふす

あふすあふすあふすあふすあふすあふすあふすあふすあふすあふす

あふすあふすあふすあふすあふすあふすあふすあふすあふすあふす

父多 池 自天ありとも去ニコラメキ村あり
十町斗山よりあり

寺 カキ 池あり 新海の町郷あり

うらて新海よりや〜

十八日 甘露樹ハあるといふり 帯と貫字ハ下新より

うらて古本庵より〜や〜と其日ありありある日位の

川の神鏡をあるは 佐者之 禊 ヒツ 鏡又〜

室八月七日 五泉を傷言〜い〜は

九日 あり松き〜庵小い〜

十三日 幸〜庵まで〜あるや〜は

十四日 三桑をてあし 風川をわたり 聖蹟村ありをさしてすめ

重湯ありや〜はりのるふ及ぬりてあ〜

十五日 勝崎あり 寺ありい〜り 孤崎ありや〜

寺 三島 歌より 物産の 株あり
ありあり

十六日 日交り ありき〜り〜う〜り 志い〜く 世を〜むけり

うりの轟る丁位濃川 洪水切交ま

九月二日を過ぎて午を招 控在言るやとら

言海彦王 諸人と控在言るを 出位濃川に沿うて

いと三り 控在言る 白い 鳴る ころり 薄刈草

の 風 鳴る びくさ ぬい とを 控在言る 弱き 曠野

ふらふら

伴海彦神社 高玉一系 系神 天壽久山命
古木の権のしと三神神をおさむと云々

華表橋の末社等 船あり 神及古田家社 船渡

まねふとく くるぬく 報き方の える 豊は 終る 時を

臨壽山のつとふ玉とち小いす 一酒香と重子 兎の時

志のう九位 侍り けり 湯 報し ぬきり 大い 山と 高くと

いひつとふ 又君 あり 名 守の 末 守 神 海 村 け ち ち

住の 好玉 カゴ 上の 神 海 とい たり 又 聖 積 村 弘 智

法 平 の 入 定 の ち あり せう 死 骸 全 くと 法 人 あり

えの尾をこしらひ川の川をわたりてを河よやとら
道のあまふり川のゆたまでけりしく葉をぬて
保界をかろふ

六の風物よくありこれハを河をきてかきあやとら
七の節をきてあまふりし

十日ふふあまふりしとら九の節をきて
廿五日節あまふりしとらふふあまふりし

去人云とくくあうりしとら実こお地の陰晴
定まらうさあはし

十月九日下彩右本房こいり村をこい

十二月節あまふりしとらこいり村のあま
白紙のせ屋をうらうらめ

あまふりしとらこいり村のあまふりしとら
をいりしとらあまふりしとらこいり村の

連るのめき重を明 身をたり 登も之を止めして
主明りて 恒ひをある 又乃あふ 火燈あろりを
明て 登り原 杖方大のさるるを
皆ついたりを 一石燈は 神燈の 影ひのこり
取拂ふこ 二粒の 牛ハ ねあ 宛 羅くろこして
重折を 附く 狂米 妻 女 宛 木の 影ひの いたり
分只 影りて 重清く 重き 影 用を 重を
農 業

を 休む 実も 重玉の ありさる を きて 笑 河 乃 び
中 玉も 恒り 力の 余あを 一と

不り 中 妻の 影 乃より 清 息 あり ゆつこ 御 燈 乃より
んと 重を 重 清の 性 亦 あり 一 重 乃より 重く
の お を つ いて 重 重の 重 乃より 重 乃より 重
重て 乃より 件 重を 一 重 乃より 重 乃より 重
と云の 影を 重 乃より 重 乃より 重 乃より 重

さあ〜あり 際まで帽子をかき寄〜 筆を合おの顔に
をぬくま〜 子なきまぬきか〜 ぢれ〜 性来有れ
ハ ぬら〜 高〜 様も裁き薄〜 くら〜 ぢ〜 ぢ
〜 と 高ハ ぬき〜 や〜
六のぬき〜 ぢ〜 中ま〜 ぢ〜

七のぬき〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜
ぢれハ ぬき〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜

太つ 意 際て 次をこ 意をり まで 流ぬを 扱意
と ぢん 太人の云々

意中〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜
型川のう〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜
意ををひく〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜
信濃川のとき 大川も ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜
つらぢある〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜 ぢ〜

と伴する家のものもあつた時つてあつたつて
と〜も未だなるふ日とてまはにあくかきあると
あつたあつた〜
歌

飯豊山

イヒテとていひ

奥お越の三々を狩るう山つては時とてまは
玉柏園の庭あつた日とてまはむらうて園中の
まはまは〜
くれぬ

文久三癸亥

えり庭あつたまはまはまはまは
まはまはまはまはまはまはまはまはまは
りて無なり

二日のおのちあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
まはまはまはまはまはまはまはまはまはまは

備へて呼豊子の瑞と云ふ十とせホとせよあり
るありとあん侍

二月朝日御侍の宮清つうくふぬハ中まををて
あ京のいこ

三百らふひりん 中りありあ京をて一りをり

八府梅 小島村大老庵より程遠く人の
旧海に梅ハ石斗を木のああり

珠あを梅 日ま

あつ此川にそうてりか回のわうをこえお本庵

いこは

五日下物さうてあ京のいこ

ありあつ書ときを屋をけふ御侍の梅三方をり

ひつよをつ梅さふ

十日あふ京うつらああ花の庵をぬ梅ひく

十七日村書いこをさふををつを寝ひり

廿百無^き志^し、清^りり^ぬてあ^ら松^の山^の王^のの^志一^見に^は塩^の竈^の
松^の多^し〜^りふ^を志^すふ^の十^{あり}あ^らぬ^り越^え海^をす^てハ
う^らふ^あま^きよ

廿^二百^二市^猪志^と見^し清^りり^ぬて小山^の田^の花^はあ^そふ
お^ねを^出る^男招^木独^の村^をを^るこ^の出^川を^流り
聖^のの^葉唐^の想^ふふ^山乃^田の^野の^木皆^さく^くち^り
小山^の田^のお^いい^うつ^つ〜^りを^志す^まく^輝燭^と〜^候

お^ねを^出る^男招^木独^の村^をを^るこ^の出^川を^流り
大^の橋^の老^梅を^あら^うも^の志^賀の^里を^り白^川
越^え〜^りま^き〜^り山^のと^り浦^の原^の村^の
志^賀の^志を^臨め^をつ^ら〜^り志^賀の^志賀^の志^賀
ひ^と〜^りふ^い〜^り志^賀の^志賀^の志^賀
り^ま〜^り志^賀の^志賀^の志^賀
あ^けて^時を^うつ^た志^賀の^志賀^の志^賀

あつ松よりつらたハ初又こ

カありあつ松よりあるといふ本越といふふより

せんぐハの海より出流瀬の境よりいふあより在

志まうして眼を強うせりあつ松川わらうて保田

く出つ

三ノ原 栗 報喜と人田海

唐甲 予

カ六日ある京外城隈の意一見は池中廿五廿六

ひる源あるちて五泉といふ

廿七の五泉よりあつ松よりつら

三十日あるう市猿王滝い水てほ源田といふあ

いころお生田より山下の細徑をりいふよりの

あつ松よりいふところふ

お生田 浦末三人佐地孫子
あつ松あり

佐の川をわたりうらすぐ小楠玄園より

三月三日大島の柳見せんと市猿玄園に誘われ

佐の川の柳

ある柳亦其柳柳あはせききふらふらきりてさいさりりこ

塘の左に山名砂押鶴表をの村に大島

佐の川岸に
川の沖に

と一島の柳見せこた不見の本三牛鶴の交りりき

こ三里の石輝燭を吹つぬみ各川あり映して

照をあらうせり舟を中の川に流して柳をゆく

二本といふふらうら柳をまくりて玄園よりうら

のりあり柳けり

あつりてあここえ多あうら月日まきと鳴る月日と

いりりりりやえをうら柳あてちひさく屋ハきき

あつり

南三系柳子

月洞村より
一里あり

十三日市猿よりあてうらうらうらうら信濃川に沿うて

新館田より舟の中江川を渡りて兎の本塔をつひ
無村といふる所より日見こまうり
—— 概て秀吉塔
とありていと寂莫と能の亦れ大川はをるて本を
指すといふは

十何の松古より立ちて板の城を築つこひこ
佐の川のせりよ出せまきいよふふふ
—— 海をわたり
て古名のまきこふふふ

北なる古名を立ちて左側三ヶ所を築て栗林のわたりこ
佐の川をこえうすこふいこふま周を村母をいさり
里こ

ホありま周の僕に付たりぬて

鞍系 榎 親吉の人名 旧館田と
あり古名あり

の村浜に温泉あり松より十軒斗りりらて論ふよ
山脈をこころるる二里五里を築つといふ

廿月七日 五象立てて中まのいころ

十一日 中まのいころ 五象のいころ

五象より 新考 田のいよ 田植をすまの 牡丹杜あ

来さより 之まのいころ 種もあは 田のいよ 清のあまて

種もあはてまのいころ

十七日 下新のいころ

廿二日 新考のいころ 種植をあけて 五象のいころそ

まのいよ 此のいよを、いと 五象のいよ

廿四日 村松のいころ

廿七日 五象のいころ 告てみちのくま ばのいよ

廿九日 五象のいころ 山旅まのいと 五象あは 水ハ中

借をりりて 五象のいころ 河内公のいころ 下まのいころ

山 五象のいころ 河内公のいころ 五象のいころ

廿一日 五象のいころ 命終のいころ 五象のいころ 五象のいころ

淵より石塔一臺あり唯中流より八段ありと云ふ人の言あり

丸き石のわし一柱ありと云ふありハ一不ぬさ寸わあるハ
七北寸あり柱のともあり

溪川に沿うて山深くは入河内谷十ニヶ村あり

けり実ニ僻地ニ態あり坂より三月に言はるるあり

月出けるより斗りの満海あり又志のく山海を

よて所加の川也生小を地より船をりて居る

津川よりやとるけり之の報云

其より津川よりきき屋の傍をりて招きに船お

ハ本山ありつる船をよハ田より多居夏越境より所

飯かき山夫丁程年して言ハ一室川を山頂也りあり

よて船津よりやとる

津川より船津までを以山海之又所加川は終日

沿ふ碧潭あり言ハ一将け海乃十三三の七を

一人こゝろ七ハ走つゝふなりたるのありて果おこ
百石の道り荷杯十斗の女の妻と不男を有る
たうりねをこゝろ又越後より宮車あるお一控めなまこ
出るゆゑ敷文二十人九人宛一車を通らる口こ
しておめハそれ母あるの付まひり体実ハ衣こ
九九の型派立てヤチ山海たるの相時こゝろ
茶代山おじよこ山をりりて片門とつる里ハ私

持ちりわらうて気ま高村懐ちあう立木の親書をね
坂下若菜三書を付ひ志ハくく印をこゝろ

五月十九日柳は日清つ坂下より斗山中あり

柳は糸巻古 本字をまき糸井野法大法師
主験彩より

本字をまきつらうておねとあり照下こある此川
溜くと清水奇岩多く住まふこち停りこらうて芥子
大思をうく

其の取手よりて方久を返さる松のいり桂等松を
討うて大冊松多しこや

美松 言はれ松平松尾彦左衛門

美松の城ハ蒲生氏今松平徳加藤嘉明等の名物
の在城ありしはそは保科彦直より新ヶ城と云
糖苗代を龜ヶ城と云

酒井社 播磨守 天守古温泉 城あり

此七の松松よりて桂川より

お所 川中五十石斗り 橋方糖苗代の堀の石橋

四川 大橋よりあり是は阿波の川に海を

其のり桂川より

六月三日 坂下よりて昔はおこいり

あつりありをき名所を而来こり

千原系 苗葉名花多し

薄墨抄 大正初年田子あり本^大をかひらく時寺等
新部とて一りあり二ありとそ
又南条村と海傍にけりしをり

田子山三原 松^大あり河海通り橋のつりありとあり
ありをみる寺ありとありとあり

熊野社 新部村にあり八幡をうゑありありとあり
新部の神部法ありとありとあり

新部 新部村にありとありとありとありとあり
ありとありとありとありとあり

寺は寺 新部とありとありとありとありとあり

十日あつりの酒は澄さんと寺はをせ小道井をこて
山はこけ入る寺とあり

新部 新部村にありとありとありとありとあり
ありとありとありとありとあり

二軒ありとあり

南下の温泉の流水を汲取塩を製するはとあり

ありの塩屋に入て一尺大きなりとあり

新部あり山より温泉を汲りてとあり

寺ありとありとありとありとあり

宛とありとありとあり

示現ち 日まゝあり

玄翁和尚の型玉高源型の如生石 赤坂のちけ地は
禪刹をひひよの終ひ終に寂くふと云はれ重し和尙の
之廟あり 是終をす終あり

十七のあつゝのちて昔は終あり

北百昔はちて坂下といふ

七月のり松名田急流にあそいんと終る 早さを凌いで

三浦坂下の地石をちてこれ終る 終一のそ途に

高久高相をちて終流坂よりと重地村をちて坂

ありぬ口掛の柔屋をちつゝり 強^エ清あおちり一り

丸りの曠地をけ入

十六揚 江戸村あり

これ猪苗代の湖に流れにうらる揚ちて弘法の
佐といふ高の揚ち

さる言くうる小坂をのりよとく〜五月の始よりさく

残るに赫とく〜て塘り〜

猪苗代湖

其猪苗代湖は四里可と云くる海山に湖
ありありとま〜子〜
鯉鱒の産ま〜

湖の入りをつうて水濱三城源を至陸を至やとく

又日晷を立て湖のあり系をこく

小卒源と神 此社も磯あり

お〜運ぶの字を兼裁け地の風景清くの湖

仙よりして得る天神社を御法に湖と相持る

〜してちくつ〜なり美代山 或ハ野崎 或ハ山 江をこして

向ふよ〜 兼裁の傍を吊うて垂のありの湖を

こる柳杖陰は冥中山の影をこ捨り〜小坂源をり

一り猪苗海澄るよとく

六日ありとて標川こ〜り二り斗りの系をこえて仙臺

海原の如田晷の出つ

あ積山東猪ち ヒロタの森の入りあり

小里こ松浦佐田姫湯あり 託托石ちの湯園あり

あ積山 アサカ 口和田のお湯屋の傍にあり山こ
こ松一本あり又湯山とも云

山の井 あさう山の下の田舎の柳 湯池にけさ
こ松一本あり又湯山とも云

一説はあ積山はあまの酒場うもつり片平おあり

山井室の湯 在掛梅おちの者何れもや

あ積山 と定りる湯

ミチおくの湯考の湯井さうつみり人よ意アわらん
と古きよとえりる方神及云松波の湯を左をぬてあさう山
湯池うもつりあさう湯まーうつり川池もや、さう
たぬいづれの湯をさうつみり云を人よ湯池れ
もまゝお人あり 湯を尋人よとひうつみりと尋あり

きてと云こ

さうう本ま松田の三湯をさうこ本松こやとら

七の品をよて

二本松

あなを那子お彦の播下町あり

播下町あり

狐谷隈川

名源白川の北より出て仙臺谷の北より
大津に入八十里の古河

黒塚

堀江に松板橋とせり

山名屋

御堂町の屋中より方石いりつゝある人獲まね
りりさぬる昔人をその世にまゐるにえん

こころおのりあきりあきの黒塚はあつこのりりよまへ

珠の卒の兼重のうごあふい女のるるり大和お彦とえり

けだすつてあきりあきり黒塚のわうをこえて二本

柳は丁目まふ法あり所をよて

福名

信ま那板倉屋城市に名を屋生物系を織神
身布信ま那板倉おおありけだのねえん

夕陽一里ありりの地系をりて源のこやとら

ルロ界のまにまあゆせらぬて志のふるまねん

せんさるる一りたりり記さるるうう月の輪のわたり

Handwritten text at the top of the page, likely bleed-through from the reverse side.

Handwritten text at the top of the page, likely bleed-through from the reverse side.

をこぼるふ志山ハ福島の城ありあふく川のあ
るこよとある志山は河のまこと地系よりあり
又思ひてうふ及もく在玉中羽のまこ強ふ

志のふ山ハ信ま那の聖中ハ孤山こ

久字抄 聖中
信ま那山ハおあ洞院の三層の
塔中ニある也

久字抄 不
塔の侍ハ志山の中ニあり

神及云むうハけ山のまこ信りハを往來の人

善学をありしてけるを試をつるをまこしてけるまこ
とせハ石の面下さるまこありまこ云こ

掃る石
久字抄石の侍ハあるちひまき石と石面と掃るの
掃るまきの者をまきを掃るて掃人のちと屋こ
まらちうちハ一の石の代りあり

ふもとの瀧のまこうりたりの膽胆入

医王寺
胆胆コあり
本寺系法也

此ちの河の山を大角の城址又丸山とも云ち一佐屋
在司の居城ニ在日まぬ信名信余一歌の横系法也

の湯ありちこ入て糸菱の及次信右位の禮を
夫の招は籠竿等此仕拍を二足に

を穿いあうをよ御垢をやく細き云そ此拍飯

探まうすは温泉あわい湯入て湯をくら大壁

道を穿てあやよ多事家之灯もちり水ハ田研

妻の火くけ小孫まうけて砂に拍入て雷

鳴あうりは隣て砂とまゆり登拍をせう水て

砂うに拍痛きおこりて湯入斗りまちん 砂拍の思ゆ

明水ハ又拍をぬとありそ湯の件十ニカク縣心隔のまひこ

湯の湯ニ融ニ融つくりてお十新新をちうへ拍め

あまう拍えて入湯の空をもちる糸竹のきうたよ

こえに拍けあうり湯と湯おあうりる温泉ホキま

あまありて高裾ハうり実昌平の法付るまあつたよ

ま息湯をきぬる富者拍臣のまきうーるあり

細尾の八幡塚とあるは八幡塚のさねる八幡塚と云ふ
おのて王さまの御りよ者と云ふ人伝る

因る云作を位まのる郡あるををつうて糸を割る
る莫大之能中福島の市を定一と云ふ郡の
民小寺御め家あるそは之と云ふ一ハ糸の直經
ますく美りぬハ富島多しと云

九日御塚をて師之師あるその村ををるまお

口語りし出つ藤田新なるそと

經十思源義家の子孫塚之希世の破不流佐の母衣

豊松美經の孫豊松十三年大松あり經塚山十三年あり

下組の宮址作達の大木戸おを島田をまのて二見に

大木戸ハ久治久幸神立をる素御討死の地之

貝田越川山越なるをる破産塚ハあると傳ふ

あり

甲曹記

去人ユレヤウ聖と云り
東遊記ヨハナヲ聖と云

佐三郎是子の娘ニ甲曹を名せし縁をまつるこ

父直のりし又雷鳴しよりちぬハ赤川ヨヤと

十日をたうし暮をきて白石のより高き山村なるをたふ

る時より此あうをよ三波おと云はおまおまお

八折田

白石より南田ニ至ル所信あり

昔あるを平記といふまに思えらるるま城野信まといふ

あるの考めの父をたうなるまの信りし田をたうけまつて

志聖素のまの落合にと云まにひら斗なる田八折者

昔まをよ明して一折しし考ありし大日山家ありとて

みえのめんすすをたうなる探あうの田中ニありま甘り仇を

討ししまハ白石城の鞍ニありし川原ありと云つる

所係系地跡は中一坪のるをいのりし験あり

十百のりよるをきて柳邊をを捕しし白石の城のるを

此木を伐て名取川の橋柱とせしめしむるありしや
招はけしむにちよと云ふ詠より代にあらは伐あり
ひハ植継ちとせしむと云ふよと招ふ葉のりちちとく
のるひてめてとま招のりまらん侍り

此木を伐て名取川の橋柱とせしめしむるありしや
招はけしむにちよと云ふ詠より代にあらは伐あり
ひハ植継ちとせしむと云ふよと招ふ葉のりちちとく
のるひてめてとま招のりまらん侍り

招より招はし木を三月裁 左せ致

招はけしむにちよと云ふ詠より代にあらは伐あり
ひハ植継ちとせしむと云ふよと招ふ葉のりちちとく
のるひてめてとま招のりまらん侍り

ふ幸を種とやあいまめしん

招はけしむにちよと云ふ詠より代にあらは伐あり
ひハ植継ちとせしむと云ふよと招ふ葉のりちちとく
のるひてめてとま招のりまらん侍り

いづれいづれとまをさつん

うらて海原の招葉を少りしと木所をり筆て由一
命よりありいつこふ月のぬりり及りつるぬの匂を
勝る標ををさしりともあやよぬりり(道)をり
て筆て由の扁照院日ヤとら

中野実村の歴史

中野実村の歴史

中野実村の歴史の
中野実村の歴史

中野 邦よりけ玉のち花見あり 終ふおろし
聖名田の及祖神の山家まで流るる一なるに幸いふ
とちん言まつらちひさよふをうらみて去かへきこと
うら斗りの塚の二お相まきく生くう 誰こ名ある体
あり死後の言五在り作 拙中野の巻 聖名田を
あゝまをうらつら昔お清もたまのやうと思ひれ

中野実村の歴史

うらてまつら山塚をこらり 聖名田あり

中野実村

中野実村の歴史

これ、清輔お屋の伝言も、あふまう、おくの名、おの
おめ、おこ、お三、お聖、おを、うら、うら、聖、聖、聖、聖、
一、おら、うら、うら、うら、おら、大、社、の、社、あ、る、名、取、川
流る、流る、の、堀、本、あ、る、り、れ、て、と、ち、を、集、ま、る、あ、る、り、と、

中野実村の歴史

おまけの地記に云ふに、此の地は、
昔は、
山に、
石が、
散ら、
り、
て、
居、
た、
と、
い、
は、
る、
。

石を並べたるまゝ——又、
石を、
並、
べ、
た、
る、
ま、
ま、
の、
ま、
ま、
と、
い、
は、
る、
。

石の、
並、
べ、
た、
る、
ま、
ま、
の、
ま、
ま、
と、
い、
は、
る、
。

大、
法、
師、
の、
地、
所、
も、
京、
師、
の、
名、
を、
取、
り、
て、
居、
る、
。

水、
の、
清、
く、
流、
れ、
て、
居、
る、
。

ま、
ま、
の、
地、
所、
は、
仙、
臺、
の、
地、
所、
に、
あ、
る、
。

十、
四、
丁、
の、
地、
所、
は、
昔、
昔、
の、
地、
所、
に、
あ、
る、
。

天、
満、
ま、
新、
加、
子、
と、
い、
は、
る、
。

おまけの地記に云ふに、
昔は、
山に、
石が、
散ら、
り、
て、
居、
た、
と、
い、
は、
る、
。

山、
の、
地、
所、
は、
昔、
昔、
の、
地、
所、
に、
あ、
る、
。

ま、
ま、
の、
地、
所、
は、
仙、
臺、
の、
地、
所、
に、
あ、
る、
。

地、
の、
清、
く、
流、
れ、
て、
居、
る、
。

木、
下、
葉、
は、
昔、
昔、
の、
地、
所、
に、
あ、
る、
。

家、
の、
地、
所、
は、
昔、
昔、
の、
地、
所、
に、
あ、
る、
。

尾、
の、
地、
所、
は、
昔、
昔、
の、
地、
所、
に、
あ、
る、
。

み、
さ、
あ、
ら、
ひ、
の、
地、
所、
は、
昔、
昔、
の、
地、
所、
に、
あ、
る、
。

をりて本櫃十二合よ入てもちてのりりぬぬハ人
あまぬくまゝて二条のちぬまこれを見あのまゝて
人まゝあつかりて車もあまゝとちりぬらとあ
いゝつゝの侍もあゝいとあ富のりもこ

玉田持理ハ京の町のりりあり是より塔うま海乃
まゝは又ハ橋ありとつらもあけむをのハお新う池
聖回玉川沖のふ来のお山をくあふあまこあら

うゝこ葉田村の葉店師屋敷の名おありあ新め来地
葉店ちとぬ比丘屋坂こゝあたりのおまこ葉に
あまゝとあ

葉店古碑 葉店村橋あ新葉の
侍こあら

弘あはりあ仲新あり碑面ああるを去て
讀りこゝ彼玉の僧道念よ信侍らうまの程の屋
竊よまゝとあといひつゝあ葉店のお万艘の軍記

神風正盛つゝるハ弘安寺に八月十七日ありハそ
の一周忌を以て云々

そ希の跡ハおまつれ本松山寺と云々あり金純

の傍冠川よりあり其の跡道ハ川ありありの

首一を云々府の昔其跡ハ臣家の沼の池に生じた

昔其跡を以て云々幸と
跡に云々可成 其麻控現ハそ希よりあり又

二里の程程をりて

土庫碑

坪村よりあり跡をり入る三三所一堆の石の二あり一は
る石の跡の小石を建より碑面ハ字解コありあり
と云々城の碑と云々碑のりあり

跡乃云つ所の石あり云々不竹横三斗石云々

官すて久字云々之四雑国界之新里を云々以ハ城跡云々

按察使鎮守府将軍大邦新臣東人之所置や天平

宣字六年冬議东山跡度使将軍吉美朝臣撰

修造而十二月朔日あり云々

和泉三良君の御書を鑑賞

神皇正統記の神代卷の御書に
見するを御覧に誠ニ喜ばし
御書に御覧に誠ニ喜ばし
御書に御覧に誠ニ喜ばし

神皇正統記

御書にあり

神皇正統記の御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

御書に御覧に誠ニ喜ばし

うり 船人のつらさよりまうせて舟をこえぬらつこいあれと
壇うまゆ 浦こら 船の徳よりなるしそとあめらあ
里あり 此 雜名ゆ 城 築 日 赤 名 ぬ を け し め 大 小 の 名 ぬ
をたりのすこ 勝めて 竹加ろ 浦 壇 徳 浦 一 里 浦 といつら まう 小
船をつけて 毘沙門山 九えら 二れちりき 佐 仙 彦 の
香き 橋 といつら 人 形 若き くれ し 松 名 甲 山 記 二
是ら ころ 一 所の 終 務 の 地 二 言 此 山 とい 南 工 び 一 や

山 東 二 大 名 本 以 小 一 里 山 あり 之 所 漢 を つ け 山 記
の 山 一 里 多 松 名 甲 の 佐 彦 を 勝 め 地 を 近 近 二 二

田 代 山 記 此 山 の 南 端 一 里 二 山 二 一 言 此 山 とい 南 工 び 一 や

山 記 云 毘 沙 門 山 壇 浦 の 南 端 一 里 許
竹 加 ろ 浦 二 一 里 あり 佐 彦 一 里 二 二 相 あり 相 記
一 里 東 洋 を 俯 視 す れ 一 法 大 名 ぬ を 一 里 西 一 里 二 一 里
一 里 一 里 一 里 洋 を 隔 て 山 記 略 聯 綿 記 伏 を

重むぬ不可言言——山松苗境に在て東山の
三寸を并観す——

之々此竹聖蹟より布帆をあけて放馬植木

細形島空風海風津おをるり何れも人衆あり

大島之け居小島あり也にあり皆相生て福をなせり

船中主風波ハ湊りて四船多く人衆をかゝる

うらてふ島名山ヨロ得うりし舟をうけり

大島本記

松島の東端より

四山記云大島本記松島の東境之島名甲の西かよあり

山勢絶々絶絶をさるる船る舟絶頂皆松杉の山類

を伐て遊目る便にありハ空風波細形島等あり

諸大島を柳鹿王下視——主なる後工居する星を

標散の三小島繁然つて主形を造るるもの

あり——西小島と富山とお對に其倉を築て天工造んと

此山と云ふ海を以て甲子の如く一層船の渡その左に
小斗出して白沙を松宛として十里歩陸を環
列する如く一帯は北東洋として天ある一碧白帆
さいちり唯重華の巻し海を天際に見るのこ
満は神仙の仙境宇宙の極超あり遊者親見
して始て余り言ひ塵をちりさるるを知し
まよりを風となり復史の君ふ三りの波り一たふ

の輕舟をふりして松島をありし扇言の横とこ
やこもるもなく初秋の満月を右をみえこ出て
重淵の島をみえけを思ひに舟の生涯の如秋の
をまを言ひこりて風雅のまの面目をみえり浦の如く
を言ひては十島をみえてすめり月影をみえり言ひあり
を眼のまふありていと感ふり一程松島は笑ふり
めしつらふのこのたふよき

十六日朝王齋てあさり遊遊

松名田

地すまつりり民家五六十軒
松名田あり

又大里

かき山ありすりー
松名田あり

福浦島

此島一の三井をせに
実竹と云居あり

瑞々歌

松名田と云居
流といふ

神乃云苗ち世二世の昔まの
石の平は言に出ありて入
産物朝の酒屋山に
ま居居 禪師の住化日依て

七重草尾路りてを
石と社と居
かをを群仙去
成就の大

仙遊といちゆり

報漢

見久
仙遊
居

る寺
晴好の家あり
ちち柳山
居の
等と
百家
々
豊を
写
の
挑山
其
居
を
并
ま
して
け
ま
ま
の
居
を
ま
ま
ゆ
を
い
り
け
ま
ま
の
居
ま
ま
ゆ
を

雄名田
古名
津島

雄島の磯の地つきまゝて海へ出さる島之海月橋
をかきりていづる重石禪法の子室の禪坐禪石
松崎庵石仏重あり松賢碑を始して詩あり
仇の碑ありこ松島の石ハ姓ありまゝて山屋を
くり石階ありをまきまの白由こ

之府より舟をりて大浜あり松島より一里あり
大り塩場あり一漕りあり島に松をつくして歌

を此ハ天を指ふ此ハ海にありハ二重
小きり三重なるまて右カうれありつらなるあり
あり松あり児孫をすくあり松の縁をやうふ
松葉の風は吹らりて屋敷ありつらうこめたり
ありまき寺危宮然として美人の顔をよそふ
千里松林のあり大山すまなせのわさよや造化
のまじいづぬの人の集をよひ初をまじいづぬ

年々ひしひしあそりの佳節に船をありて海をま
ちり結つ

三浦溪

松島のある隈にあり

四山記云松島のあそ海をまちの海山にありし溪
の所見も大なるは但し一島岐の歴々帆影の明
滅去りし船影のや京山ありと神話の日記中ニ峽勢
迫、迫、天形を窺、口宛若展榻扇とハ能く京を状

せりといふを

と音ハ瑞霧すれ燈籠流しとて魂あそはるあり
これをおんとそ々の人形集にこそこのは扱百の燈籠こ
火を踏んでこそなよはと不澄ふ波は漂ひ島々千
隔りて方糸はすふ霧散るはるる雲いそるる
十七日雨ちりちり言城駈けらん塩漬おとありこれ
より山路はこころるあり

富壽山大仰寺

午方 經き方

堀の田村丸大田幸中の建ちたる所

富山

松島の中隔あり

江山記云江山ありて遊江世に初り、志多り如ハ
是より累に即紀平海に松島記に海濱處に漫遊
又子古梁禱海に松島記に等々

あ積良計り果信り吾先考りて去を賜うて天

下山の絶猪の地ハ神仙の地ありて常人の踏入す
及手はあつ以まき奇絶の境といふ一々之と誠め
られらると云々予は三日遊覧してそら神仙の
如境を記に思れまあつた

翁の及ふとさうひふあさりハアテラ坂なり人海掃あり

あやふ山海をさうりさ東なき方派のありをさ

松山の野に出又あつてく聖經をりて南詔海乃三

本木ヤヤ

けりよりおく南都池煙旦と名ふ下一里をいふ人
道を見たりふ徳ありと名ふと云く明えて大
魂を清に清き水は方及て何種ゆきして
それとて云ふ小及十りを以て方及の二里と云

十の三本木をて古川に居る右並木の柳

徳強揚 弘中コアリ

徳強揚 此のを云えの揚やそれなり 左をまき

ふふふふふふふふふふ

定家

徳強揚 此のを云えの揚やそれなり

くさけてさる袖の洞

道屋をいつ月を流しありつる器をて色集 ヤヤ

何れお語に系系の婦は此松と名ふらハ海道の
ひうの山端にありを二分の位にありて
そは強揚なり

十九の品を左の人あるにや又二より主場ありて
有破す一の實 田村の唐塔のこ 山の頂を三指川にやとる

井の音ふるるあり咽てます 強り水ハ中さちる

清は衣川をわたりてあはれあはれを三指川に
をさしぬて 龜の跡お去 仙臺冥 鬼柳 南社冥をこ

君は鹿王やとる

廿一日君は鹿王にてこりあまより 心はまといこり 南江言ふ

やとる志のくせ印をこめてけりてお 慈旅をさる

志はハ 禪母のこ 南社之侯の持味あり 人衆千朝こ

竹の豊源川 駱のあまなる

つれく 南江小南社の名所をよく

采田耕作云
南社地
不戸令
福号王五トツ 未松山 二戸郡一戸 波打峠あり山頂の山石に見え
多く竹ふる 松ありぬるこ

船回玉川 九戸郡 船田あり 釜釜ふるり 赤山
二日所あり

土壘石碑 七戸 土壘神社内の古中土埋り

厨川

あぶ原任の城址之、葦原のゑ
壘よりあり

松橋

葦原城下如之川よりあり
日本三松橋のこと

狭布里

新本原

葦原の里にあり葦原より三日路ありと
狭布の神布を織玉子の言ふに

山名山

南都ふことふ、或ハ若狭山といふ
壘ハ葦原の山の事也

十符若丸

三三三三ありと十符一編て
織成なり

末松山、玉川、土庫石碑、若丸、南都、あり、哉

と、た、と、そ、や、を、つ、り、程、け、あ、り、こ、世、印、を、受、て、足、ま、か

く、た、れ、と、系、源、の、月、心、こ、う、り、さ、ぬ、ハ、ま、り、を、印、致
う、つ、は、る、さ、い、る、ゆ、り

た、七、り、三、白、巾、の、旗、の、れ、て、は、な、り、清、つ

龍夷原

田、右、丸、臣、法、一、の、兵、城、の、場、之
言、指、ま、し、一、壘、海、王、赤、原、言、丸、赤、の
旗、あり

按、り、こ、ま、加、る、城、の、碑、に、龍、夷、の、玉、印、を、さ、さ、る、る、る

は、印、
と、あり、さ、ぬ、ハ、あ、り、
け、世、の、り、る、大、と、龍

は、源、の、地、龍、夷、を、り、と、ゆ、け

豊海川うち流るにふれむひより結ぶる尾
さうらむまをこちつー梅路侍はましく嘆りいと
をり

吉野お山清あち

吉野お山清大田おりちり

本寺土面説き奉る大田二年坂と田お丸車夷
放^仁伐初形のこめ流れは清あちをうつてこちこ
一字を建ちて一あこちあ孫日とて諸人殺すに

おりのおまをてもとむれをうつーあ流るやまら

お九のあ清まてあ流る難漢大梅 そは枯果うちあち

一見して衣川 川中五石より 武三お村の難死の地ハ中

の流るいふ雷こ

うらて梅川といふ遊亭の勝め高うー衣川

の一章そまて水之川入田安の古松ハ龜井

片急於木植預兼は木の場ーるーこたふきまら

經 中堂

本号久孫井徳ハ
多お院の在る府ニ

重四ノ清徳主臺徳寺徳三ノ徳あり

一切經 経身を泥清徳の寺府又主臺徳の細り

も者未名徳の細りハ宋板お本お一切經あり

小聖三ノ風等玉軸の法華經あり

中堂

徳色重もふえの重おこる主府ひあり
道合將軍惟原親皇十条お時ノ命して
つゝ〜めふ

徳二小三ノ坊の権泉三ノ右徳の三桶を細む

神乃云云重ハ三代の権を細り三ノ仏をあるに

七室おうせて珠の鹿風ハやみ水色の権お

重小坊て院敷席に云重の三府と第一を

四酒彩ノ圃て葦尾を重居て雨を凌嬉時十歳

の証云といなりあり

五月るお徳ありてヤひくり重 左史載

古傳のいらく高山の建ちハ建永二年といり

久久矣と云る五十の
星を記す 爛熳蒸気大流すて

宿那年深系清御中皇のたむくハ

神府三百余字と云建武の火と云

而にあり

な不草泉言館をうんと

多難山

義經

言館あり
義經甲田を著る

草泉ハ言館より一り許すあり

ふふ

院 義經未詳あり
又和記の院あり 侍の法塔

そ代の基なりハ

の時ふ六の美法乃ひ十二神

くくめんとて

ハ 婦のた

一 巻百支

一 巻百支

一七乃中廻り^{アヘラレ}の羽波 六十枚

一安達踏 猪布細布 二白端

一羅^{ロスロ}敷 猪毛 五十疋 一白布 三白端

一信夫又字摺 十端

泉の城址ハ衣川の石より康ひより筑し又
右衛門の城址ハ中より此河の山を云柳の法不
七加祥ち象隆ち主越ち南大門等の礎よりく言ぬ

小跡あり杜南の詩小玉破山河在城まき本源感
時^元濺涙恨み多騒ふなるもやまゆれり
着せぬと唯詠 城裏菜枯一時の足ゆ
のうち小者も涙を流してきりぬ

蓬谷山屋ハ平泉をさるること一りあり

志強山あまち 玉屑々書セリ 舟りりハ志強山あまちと
延暦三年板田丸の建とあり

山屋の洞小室をつくりこめと里志高寺あり建りこと

蓮谷虎雄 奥州鹿沼郡極武朝威首魁
 路王赤頭等極武朝之地

筆洩ふるハ件の畏沙つ天邊をあ主以ハ取百年を經

お信ふ昔ハ崖ヲ鬼ヲ殺シの世ありハを田村丸

の足治一終うて得け幸を建立たりと云

蓮谷 大仙 崖の二の麓に鑛石

志りく勝地をりて

いつくの瀑 龍井が伝説あり

此ところふ一帯の深川あり巨龍多しスの

危未々水ハ彼東坡在土の柱ハまた似たり

少龍とし松梅おまく生り瀑布ハ深くたりて

四十八瀑といふま掛四所ありて実といつく

の名むをりく次龍りまく善て山の圓コヤら

ころハ初まのこ

周云ある人平小本破をあらり而亦豹山の厚朴之

といつり高懸といふ勇取の玉境といふ山なりし

かき

たをちのね

ここのけのくま 栗駒山のをうた本の

まうういあおとまう ままうう

此の山の目よりるをうりてえあ 尾をえちう

やうらねるをけ ねれいあねるはうあ

八月都るなるうちて三本あこやとら右川のせう

より及ぬりて大まうう

この三本本立てまき雲の歌をねまのうり人を産

うて捨うまうありき路ニ里をうりのるはねるあてま

くをねさうりこけま ね風京猪れうね

あ架のううも一をうあり夕陽南月言こやま

三り南月うねる小福浦島の空竹のせ印を

あまう 怪お島あ笑の跡を ねふハハ橋通りこうり玉川

赤松山沖をあをこえのつをりなる けしをとの

まねるこ及あ くれうりうちたれハえあ 尾を

仙府といふ山屋の型の清川にみ暮らすまゝあるく
咲つてすてうり

河の隈崎に玉分所ちて本所の野きてこり斗の
所つてあをさて中田信田こりり筆うぬこりり

五日まにく秋の初より おねのす一越んと

笠名山よりあやしよ山跡をこりりとこりてはま
より膝型をのりりありあまりま刈田と云温多坊

ふいころはの重崎山集清の人まゝ高深雑せり

ふみ只より出ぬ小越の山跡

こり越 仙臺より言の山ち一おけお田取こりり

板屋越 ふうぬよりおね者はこ生信ま取こりり

親山越 隆と親野井浜より出お村之親親山こ出つ

笠屋越 仙臺より出ぬ言のこ生けお田取こりり

うやあやの屋 笠屋越出あすこありあは真すこりり

麻布敷

釜ヶ谷より出ぬき釜ヶ谷の北の川の中
に石を置き流すは流石を置く

その人を主信うて多摩川に流す

の流石の年の昔に似たりを流す

して山とこのあり

多摩川

川田山武ハ流石と云ふ其の
石は玉と云ふ

流石王権現社

流石王権現社あり流石あり
石を置きて流すは流石あり

流石池

流石池の流石あり流石あり

流石あり流石あり流石あり

流石あり流石あり流石あり

流石あり流石あり流石あり

流石あり流石あり流石あり

流石あり流石あり流石あり

流石あり流石あり流石あり

流石あり流石あり流石あり

のこる剣こ

法如毒法塔の吉山王社中子一井山ある所院二日川
そは外法重地を言ふ

石階を登るる所殿十町岩一山を重ゆて山と
相拍ひあり去る處て岩溜りて岩の古むひ
とく或ハ標をつけて岩をうちぬきありありひハ岩よ
階ををつとひて法重をおた岩よと入階のきり

の白ハ時ありぬもそろろ感を生た

通山の真大院ハ仰り斗り隔りまの法工工の岩標
あり寺九十九石中三石といふ標工工大木ありま
ふ一東源止節の時あり人布よりうぬを二日とせ
ぬ道標徳くく一実こまありやまら次

九の山ち立て平野をるるくこり天臺職回麩の法
在ふこけま及ふてよ

高木山

をさかき山と云
本字ちり草

掃蕩より三り世て屋を以て深鏡を以てやと
高木山は清風なる隙にもありむりし一壺りて旅籠
屋とありいと云ふ

十日小るなるうら高をうら新すまてはる曠果之
野ををこなる一 桂標を以てありて屋を以て
名もあはしうら高をうら高のせりし治ふ

高木山を以てありしは新鏡を以て高をうら
ふりし三り余あり人少ありしつうして高を
とふ高を以て高をうら高のせりし治ふ

一杯の奥より入

高木山

神尾よりみちのくより出て山形を以て高をうら
高をうら高をうら高をうら高をうら高をうら

船小出酒田の漢子と海に入ふ二十里の古海と
古を此より二里と川の所ぬはらるる船艀のいあら
あつたは月をうりけ川舟をやうして船を曳入をて
まふ舟のうららのあらう人のおをいなといひて
うありあらふ似まのふ又一説船をつまらるる舟を
いふ漢子おをいやといふんをいあら舟よふせてま
ふとなれうりと漢子船をよとをこり

十二日漢舟より漢之川の舟よのうをおりをよとせられ
物産買あらうちうり清川の舟をち山石こして岩
音く及なくま岩おまり橋本満くして水ハこ
うもまう——白糸の漢舟をのめ——して此舟は十
以漢者とのふ名をよごてん集ハ方石田うり川
とあり
ごてん
漢之川のうち此船よりまをよとせられ川舟あら
こをよとせられち七散在——まをよとせられ——と
とせられ

左やふさ
集と書この書の名なりけまはる程石ひしくと
ちて晴天月道源よりあふてまなく集の落はり
と集はふして程ふの晴天とつとも未だ
并さの波

板倉山 山田より船田谷つり及古れと流川の月

夫木 此のくみ ちうき出ぬの板まの いこ人志波

山 あそ程 死

仙人 老陸村海をまつと云け重の下を仙人う
瀬というて書と川の程まこ

流川より舟をあらう 庄田谷 是より 之をわく 船程を

りてあもり 川をわたり 板山 酒井屋場アリ 下と

十二百 やうをまて 流之川 沿ふ 是 まで 川中 唐 石

たり あ 船 な 里 ひ ち う こ 山 あ は 名 海 を 眺 む

能 危 天 小 浦 て 日 斜 こ う う て 酒 田 の 漢 就 ち 程 ち 小

や

十三百 象 酒 の 月 見 ん と 酒 田 の 体 一 り 船 田 下 り を
昔 日 酒 田 酒 田 を た る く ち り 名 海 山 を ち り して

藤崎とつとまをさるひうらやとる及さるるふ

多海山 最世山 風皇山 風岳

多岳 ちとせり

多海大明神 多玉 一多 多海の絶頂あり

多おす一の言出願之持麻より絶頂をたり余は時

多とえは多本多花多一とあんな年六月の未

より七月まで法人を山に

南麓より東に記す云酒田より吹うら加藤

主乃お里して初侍人あらく又田畑もをえ

左ハ方海右ハ多海山とてさるる所ハひよう

う海城あれハ及海もさたりあう次は世の人とて

運あ好まや主乃三あ十君あつと一柱を建て及の

目有とせりと云々持南麓は及をさる小大風海を

とり及海と運ひ志難きせ一併の事と云えり

主酒酒田の強富本間来けさ里う君小松を植て母

程をふせくをいふたうたる松林ふなりて風まよふ
ふく村もあり人家も少く以田畑ハ多海のふ
もと道は廣くして及も傍及び及と二ツコかり
は東も往あく西面の程もあ——南麓へ往りハ
天明二年中の事なりて左程の昔をあたひ出
程をわし四羈旅の三千廿五を——り往りたり
十日の暇より三日の暇を立て山旅より

一才刀開け及碑

ちうよころ暇う小住る南老村といつと山並十
なりの畧をを厭ひたはふ小ありや終り日神
徑を切ひふよ法人の性来を安くする勸碑又
こえより下ハ小浜の大洋ありて老工風あり——実
程志の所なきなり

如き所といふより三時大河坂の途路より下小

大洋をこえて引ける千ス一丈こ水をちりハ茅草も色
るるあこいさるあこりこ越の米山よりハ一倍の雑
あつ——小海川をりより卒あつ山路をりあつ
濱をここる

むやの冥

うやあやの冥も云冥世冥あり
又大海切も云

こやせんこさてやあらんこぬや此
さやこさつむむやこ冥

こぬぬの出さ入さるをりす

をちこさりのあやこ冥

良絃集 有薩更不羽之文 但冥布不羽方子

こ本れこ然、初人 不歴本 雜往來

此又の鞠をこぬハ先うるせ——世屋越のすあ

——何ぬるや汝そつ所をらるる陸水玉の初定ぬ

あつ大雨をちりこり初てハ詩音の風結る

十五の汝越の事此に主として記されて

申揚

汝越の所をこれの小川よりなる所揚之
と云ふ事あり

象潭あり一物ハ此川より大洋の淵を望み入る

雲之新程といふ名あり

汝一ヤ新程ゆめて海濱一左に汝

此の初葉越之けやとあり

皇后山神酒珠寺

程曹の流

神功皇后社

古田にあり神皇正統記に記す
此の社あり

象潭神社

日向にあり此の社あり
古田にあり

一西川橋

此の所の橋あり

是のうへこく延乎此の初程と西人の録あり

橋もその田面小をあり

象潭

由利郡 夫木抄 作軒方

此のすよふ事して此を捲ハ風景一派の中なり

さて南小舟海をさへそめ陰うつりて水
あり船いおやくの号路をうづり東に塔を築て
新田よりふ道登る海よりうつて波打入り
舟をぬく〜と云はの縦横一里をうりし神居
とえり船もふき時文化え甲子六月四日の松
の地着より大洋の潮系渡り通せ次あり〜より
そのころ次回はなり船も生くとさ東海三度

存して葉田とあり伊あり能因名田をち〜め大
小の島と船の波濤あくおけは十八日九十九日
もいつり回西のたうめとあり里さぬる松島
並ひ〜名ふありぬいそ〜ろはなつ〜九日二日
舎望の舟程をうづりて洞窟よ〜
そまの島のり〜よもお時これいあ金の一杯
奥小舟〜て松島や権〜の船は編め〜

なまきりり急流の月とある月を見むひとり
昂を生ふるひ波浦ちの川ある松まきまのいさ
月いとくより多海の詩こけり多この松うけは流る
流りより猫あはまきまふ鳴つれまよも又あ
しるし世世中ハ初ても強りり急流の延きりせ
ををあ昂うてと流しハ能国流はけ島よこま
の島にのまこ

十のり波うまてえの流浦こけり河やとうつく
十七の流うり河田こけり流あまは流を人の
許うり九印をこむ

あまの宮傍指国小住りかてあまらるる

江田溪 あまらるる 流こを所といふ指の所あり

龜ヶ崎城 在り 在り

日吉山王社 ま居いとこ社 横川惣舎の社

山と小舟を繋ぐ松を植ゑ碑ありけしころは船め

源つら一服ふ小娘射の濱人衆まじりたり船る

の浦船あり小海の一碧然と小通ひ池名田斗りあり

沼田ヨリ十リ許ハ鶴居の越小洲より布帆をらう洋中ニありは

沖をるらハ松を通ひの船之坂をりて日初山工をら

あやのなるめ又ありてをう一流之川林凡字川

大川とちりを源沼居山も落てひとつ工なるてお海工入更意らとよこ

一神の浦神の力なり斗けところ之南こを源山在四所に

勢アツ海山ハ越海工つけり末工香海三山ありひを

工をつき小崎をらう次

あつと山や吹浦うけて夕まみを世裁

此まうけ噴こあつと山ハ越海工をく吹うらハ多源

工まう一早まをる小あり此うのま妙をあら実工の柳

の一漣こ

瀬原ふま 子孫をいあり竹之匠を業とす

この山所伝ふ久七と云
酒守子ハ話小部ハ云加子とてちひさまを以賞致に

酒田ハも考ト夫トあり

瑞々ヤ山を出おれを川加子 左せ哉

けりま新 新ケ云酒土 こととあり去あり公三山の談

話を喉礼ハハひ新ケ云トお終ふ報ハハコミえ

めつヤの初五九なる

九月五日酒田の人ハふいとまをきて出ここまこり
大り送りありる之川をこえあつらん種をきて

新川 源お山 林江字川をカハ新ケ云ハハ

新ケ云 鶴ヶ城と云酒井左三郎侯の居城ニ
人家二百軒大い先ニ新ケを御やをあり

ふりついでひりり おまこ諸人とつり

お林江字川を再ひわり種をこり山江

うてま向所を明村つり修験の毛ヤ

因云日向町とまで夕方ケといふ一遊人のいふま
の山原まで及神祇ノ帯を日向くゆつて諺ハるあり
の時迄此とあるとあり

黄と重重三十三件の報を方徳あり
源ねねまきこ

まお法重とま——唱あつて日向の町をすく

二五洲 三層塔

石階十上町あり佐右左より母あるは美控を
吊り吊り人といふ

指川極宝珠付く指あり侍こちひさよ源あり
集法集法の手くまに指をまきこ

お馬山檀理社縮念魂命をまつ
牛地牛地報をまつ

本社社西原之洞多々在東照のままあり未社あり
室蘇院云社原あり

南台お當のふ院之坊を山の御杖をまつめ
路ひ路ひまをまつめ

神乃云當山神乃云當山神除方神除方はいつれの世のく
いあるまきつ以史書式お馬里山の神社とちまき里の

字を望山とありたりやおのれ望山中略してお望山と
云ふや出おといふも此をおをけ玉のありて飾りたる
大正不徳とやらん月山涌原を合て三山と云ふあり
武に東殿お屋して天衣止観の月明らりて四
龍道の法の如くけそひて傍地持をありて修験を
一廊一雲山と云ふ地の験知人まひと云ふ験業ありて
りて及望山と謂つて

東照村こりりて是る左吉呂丸のるを穿をつて二葉日明
村といふ修験ありてる縁を代るをうぬき其を去つ
と云はる向所と云ふ

七日早朝をきて左あり及を道川おまうり左りの野
入言ち報言をぬき松招とあり望山と云ふ

大細流連と云ふ

流連と云ふ
大細おあり師石山
お望山

弘法注進掛梅

お石に 注進寺 大日坊 正倉に 本厚寺 大日寺

これを洞窟山の口から登ると

入り先を小連うれて洞窟の入りたもぎと云ふ

さて二りの山脈高きお源 けだの人家着せさうり

ニタモギとらると月山より海あり溪川あり 石塔

大いさう 仙人堂をさして山脈さうり 石塔

世小屋

洞窟山の入り口あり 雲山の入り口 飯茶をさすおカをこ

六十里越

新ヶ原より産まへこえり 山脈洞窟の下 産りさうり 産まへこ

掛字川

お源高山の入り口 出大木の二本掛 をかきさうり

お石の入り口より 洞窟山の入り口 美田の産物さうり

或ハ木の根をさうり 産まへこえり あり 産まへこ

是を産しておえり 先達のゆきさうり 産まへこ

たふ

日月の山ひらきまうて日月の山を登りてたそむる
る方お敷貫八景の法人お百程多た何れも白きお跡の
指こ身御を海ををけ空寂の跡をうかこ

木合の小屋 南山より北の山にありて移ひをちた
木合の人の小屋に二十ヶ所あり

山中の御神ハ細及こまるとく新志の法武として
他をを林あにこあつたよハ大洲の侍より十余名の族
祖をををを是ちりまりまふひ魂も清ら左りりまふん
ちつ

直派とつるまふりり 跡ををあんてのあつたり
これより月山より三りちあゆむまふゆうして清ら
ことあつたは

月山撞現 本地阿弥陀如来
お思の真の院こ

補陀落湯の浜口庵あり 西屋に三三三は山こ
お思の真の院のまふれこ ちと先を

のありといり又お思よりおをまふハ 三三三山唯れの平屋こ
ちめとあり廿五系三三三ををて月山の絶頂こあつ

船合九里月山より海邊山までありはり帰るに
里方細めて五里船合十八里り乃三山のうちこ
月山こそなるぬのは中不指さひくる物乃
といふ虫よこえよりあやせと先をよそを
るふもよとていへり
姥の刀りのるにさとの産へくくると三り志は
の山中やとら

九日重御なる幕の船泊り入てを遊すといふと
殊に^いれさきおあつくぬ河こ落物たりて冬のと
三りの山路をさして本及ちといふ世なりりの溪
川ありを流るるけらぬに結ま

八重山

不知具験あつこ
本及ちよりまをり

横濱村よりあやせ月山路よりるける人衆
あやせありすつて深山路こは清浄なるて

島あてに廿八村あり生らり又磯留の生らるもありうき
つたさつ——葦の垣根りの島にあり勝——て
意員あらゆとしくは月の末といひり

あー系島とりつた大島池中にまはるはあひあり
凡島に二十余島の敷よいかう——船中陸島
大に九石に三石斗りありといふ

まおに店に一杯の酒の三葉——池を眺めたるあ丹波

島といふ——ま池のまの中をう——ういつ——うはるつく
又ひらつた島はるうり部あ出らりまはるは併替諸
ことつりサ生ららちひまよ島の明風小帆を掃
うらめく池の中程にまら——と出やりて向ふの
出崎のうけこらうとあらうく者て又まはるありはるまつき
ぬ島根りの水とわ——の漕もあら——島家のあまの
斗りて難あつたよはのまはるは神仙のあらる業あら——

池の海濱 一つうなるあらしは 実中折

おのれも浮てまわり 名出 弘

お中折島見の松波さお松等あり池の里りさく
まーそおあしして面白ー 又鴨儲あましく桂り
きぬも池にす洋あまふたあまふたは清浄こ
十二百大派まうてハハ派あま大折本あまのつら村を
まゆぬ山中之初てま川に治うて拓久保り
のり 諸派実こまやまをまもむ 折も油大あまく團

折まれの火うけし妙に実の傳しよまらあこ

十三百ちち久保まて山路まのこ二り船見ま出はまうり
形種之をゆりまをまれ亦里の余の山中之又三り
性て小出まのまるあ人を病て左折ままやま
ま音の月見あぬハ一言を催まらま屋の百等
折りへ折のおまきくまあ折折こらてこま
ままままままままままままままま

廿三日也出立ちて小招のの者言ふヤと

廿四日船をつまみあり小招立ちて三ヶ所津のいり玉之

言ふヤとあり又瑞山言ふヤと

津置船取之松原に城あり
人家言判とつふ

龜尾久珠 其驗あること申渡さるる

十月三日申渡立ちて聖をりといふ言おるる山

語より得本ヤと

得本津原立て控系は原より名を双の難言ありて
重一入ありつと批りけし又おの境之控系也
を言て又大控語より

大控番中ニ板橋あり主橋の左方小控井ニワ
あり口は是を扱て控を割るに控控をありて控官
を替へる言ハ者より有也と日本にてハ此一ヶ所

わうて能食言ヤと
小控系は言はるるに凡四十里実ふ
控のなり

あり船を立て控川言能て坂下ニあり坂を言ニ言りち
をく

十二の巻の末 葉三言まで 奥の巻

あお三言ふ小印をとくめらうちけあとの四鞆のをうよ
るを思ひ物らうふ等をとく凡玉の買め此ゆ儀
二座もホの書あるハ向端をぬるかてるあねの月ハ更
りうらるま—— 南都清光ちの巻此家ヲ南を
観世書言菩薩とあり出羽の三郎弘法大沙堂ニ神川を
建より此のあやうあり又昔神としてあるの男根を

村あこま—— 仙臺南都清光の巻こまこま—— 又南都
仙臺の巻こまこまの巻友の娘首を落きたり 珠こまこま——
あはまはまてあま娘むすめの珠の袴を落きたり
を精をうよと云神業山持のこまをうりふあこま
座あつて出羽此の巻こまこまこまこまこまこまこまの
をたかく礼お極こまこまあまのあまぬハ右代丹
をたかくこまこまお織を及膝といふあまこまこまおおと

とふゆゆ 左来のさ勝こあ〜へ左勝ゆふあをさ

うらハ主形お織のききやうなる物にてさ中

葬族の衣物衣こと云ここ水も左風ある初孫ゆり

又真つた一の冥山の月也してお四三の法本孫の女

猶大に 何れも地子杜舟に熊子好日序をいつ、
檀相子松をを加へ海入りのやま勝こ ををき、何れも鬼

形の面をうみり首に鞆鞆をうけ呉に月香は言仏を

唱ふ左内言とカコてハ甘の着物孫あて厚く入

フキ一こ寸出さうり三十支斗りぬ斗衣浴衣にぬ袴ま衣をつけ

て往來泳いを標芝居の人形のと〜又仙臺伝

一巻こそゆり酒斗まうて法三酒を林あ以鞆酒あお

の乃女のう土つぬのるす之標ま法言ホ一鞆あ大か屋

をうけ猶あを競あ件い〜 これらある

服子彩〜ゆれハつ水〜こあ〜 侍らぬ

たさり垢下さうてこりさ相まや〜

其七の 松濱海坂 赤井坂 古き諸をこえて 福言の
布山 ちよまや

其八の 天喜 結くわり 結くわりのひより つまらぬ
まらぬより 見世 陰御 冥をこ 誓 誓 誓 誓 誓 誓

誓 誓 誓 誓をこつれ 誓あり
口午三誓 誓 誓 誓

其九の 誓をこり 永源 又 旧里の 郊系を 引け 登ん 凡
二里 斗り 弓系を 焼く 湯を ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

ハ 旅人 あり 其 就 小 燒く 一 さいり 冥 大 玉の 志
り 一 まで 他 玉 一 八 なる 之 源 誓 川 小 い たり 諸 氏
る 小 や たり 多 代 廿 一 一 十 八 支 之 志 志 表 して 人 一
多 志 氏 といふ

等 祈 ね 志 務 志 志

代 之 源 如 弓 川 歌 の 所 幸 志 志 執 子 強 之 一 あり

阿 彌 井 口 獄 業 志 赤井 獄 志 志
誓 誓 誓 誓 誓

毎秋新燈を大洋より兼河の邊にあふ備ふま
お定まらば次と云七月廿六のち秋新燈とて多く
早となり新燈足おのち屋ありこぬま兼河の
道折しておとつらつらお知よりい返て見
るおことあらば新燈は日澄りりらら

名古芳宮跡 左隣陸奥の境あり

明風をなこそお宮とておととも

源義家

名古芳宮跡 山さくらりり

平河溪 名古芳より少事の御也こ

一寸の山を切通し二市ハ石の洞窟より通ひて往來
次溪へ人家お百軒あり由こ

重石郡の源加文川をてこり夫の程お新燈とて

高川よりヤとら

所武隈川 碓の入り口橋ありおとろくを継合せて
おとらお新燈とて福井九十九橋とての件こ

白川 所記標下彦橋下河文

白川 冥 此一の言は此の言にありては

西乃云白川の冥よりぬいて朝と候り求

乃の中より此の冥の三冥の一にて風騷の人々を

む秋風を耳を結し 秋葉を侍りて暮葉の指

程表の卯の意は白州の二流のな嘆ろひて

とこゆらん地をすらん人冠を仰 衣將衣を改め

故曰此野 凡東海道行旅而到奥羽者

しる法揮の筆もともめ

候りあらいいて朝へ暮やらん 平兼基

乃ふあらん川の冥をこゆらん

朝をいりすもとをよき出て 能因法師

あまう風を吹 あまう川の冥

秋葉を結し 右大赤根宗

名のこたりぬらん 川の冥

こやこよいあまき葉あまて見らん 源三佐治

秋葉あま 川の冥

野川 而比自標此間過常川者入手名口

温開一故士俗合呼謂之ニ所關、山嶽集

十載 見てまゝ人——ちりぬハ卯のちの 孝通

鳴ら 垣ゆや 白川の冥 僧歌言性

東海もとちあかこちうこりり

白川の冥 冥

竹をさす成り云井田のちま玉りといふ者陸奥下向の

白川の冥さうりハ子、姓名未をつらろひてむうふ

人言小何等の相をや笑々云在る社の入及此社所

そにあら川の冥さうりハ子、姓名未をつらろひてむうふ

るんこちこ

そをわらうりいと果あれハさるくのち成思ひつ

けてるこちこ

二日未明りきてぬいのすハおもむく白坂の木のあ

けつれ

境の神社 真言宗下野玉境

三りの形をりてありの、七の

こちのやが(註)一たまらぬまらぬ三の
冥こちまらてちりりちりりちりり

栞の柳 梶の末井入にうり小三町斗り三あり

栞の柳の種は小むりハ此乃たうてあれ一見
たう一村の末井此こあとの河原を流過り者ハ海原之

これに栞のの末井といふとあり

乃此乃の流はなうく柳うけ あり人

ありーとてこそとさうり くれ

田一投擲てとさうり 柳うめ あり

温泉初 温泉教恵社之
栞の柳の傳りあり

此の栞の柳の種は小むりハ此乃たうてあれ一見
たう一村の末井此こあとの河原を流過り者ハ海原之
これに栞のの末井といふとあり
乃此乃の流はなうく柳うけ あり人
ありーとてこそとさうり くれ
田一投擲てとさうり 柳うめ あり
温泉初 温泉教恵社之
栞の柳の傳りあり

昔ノ栞うりちをうりてのう白栞うり昔連川までたあ源

那うて奈源柳の系ハ十里ほど小あまれり翁生ふ

ハあ一のうりあり斗り山の山陰にあり奈源の温泉奈

源山をさそむりこサ道柳うり越橋まで在る切あり

けめてふこをさむいふをふそ見橋といふ温泉の

昔ききてた田原の城のよやう

三日昔をきて佐山けりりの松原うりちこ言原山

日かえり友中禱ち三山に由海たりし世に傳はるる
の古山に由き古河川ハ是利たる所居の古在りなり
由家阿久保をよて

鬼^キ奴^ヌ心^{ココロ}川 宿川と云新わうこ

う此怨事小名うよ田系女の古海ハ此まより古ら七里
の川下下流玉水海居の早り水生あゝちとふ
白浪とてうつれまゝやこり

宇都宮大明神 市井にありいと古事記に
ある神大己貴命

三田屋の城六人衆おる新料理屋遊藝屋等古を流
りて通玉一の都去こ日老山へ九りと云

江戸うつれまゝうけあこり此屋をて此居ふそ
世に傳はるる山のおまゝ山を 在まゝ石橋かき井
井々う新田あゝをよて小山やこり

ふりや山うちて居る田 市井に後の
玉境に 野木右河をよて

中田 下流に玉境

式口社

利根川

河原より川あり由へ
利根を流るる云々源上野玉田より
下流飛騨に流れて海へ七十里のを流る云々

利根橋の写をこえて妻の千子や

六日昔よりちて秋に相尋ち大坂越谷橋の

橋を過 諸川をわたり 妻かやとるるふ

あのかちて大酒明神 多住の侍より 一糸話の人

と

せらふかちて二りの住の橋大橋をわたりてわづ
系をこえて

とせらふ山はさるる

本言を記さる

むさしのハ世をよ種やひつゝあやるの枝や
そふ者てあなを 福の昔に響りて 武のぬえ
業此あよりよとやるとちん云傳りて 隅田川
の海ぬりうもまを橋をわたり 隅田川ありハ世を

小弓うちをよよ
沼戸見物をす
るうとハ
なりぬ

松島旅行記

あまのこちをちる
石破小島うか

本宮跡

つゝ一
暖房をけし
やぬるよ

この
本宮跡の
本宮跡まで

去地ありや
なまな
梅の花を
かきよ

福す社取

古き〜〜〜実ぬけてある〜〜〜

湖上

きつ浦ふ〜〜〜ふたり福すの友

古村山

喜す〜〜〜つらも積屋〜〜〜

み見のち〜〜
娘す〜〜〜

見てお〜〜〜ん田あ〜〜〜

〜〜〜

海〜〜〜きみ〜〜〜

金中

黒姫や〜〜〜

お海〜〜〜

雪白の〜〜〜花あ〜〜〜

船まで信濃川をくぐらば

うー切のきりきりきりー川のゆ

福海舟中

水のこやまきあり船を足らこち

源居詰をきて

そけ白き襟小吹りあまね風

舞かあさ

名月の指やちまひさくらねたふ

九月廿五日
をてまのありねい

法のまらやさんあまな里

信濃川

水まきー香の信跡おのつら

金中

ころんておあまらうつやまね人

まつまつ 道の清り ひより や 鈴 彦 山

福多野

まはは や 引 あらて あら 船 左 へり

郊外唯を

けぬて 又 抑らるく まや 船 中 山

風のユふいと丸ことあることあり
出づるを越後の人々を懐とひ
もてやめ 実中平の事こりり

振りや 二年のりさり け 債

越後のちもこい いか月
まきりりねい

暖りりり まを つ 口 を つ さ 丸

お松山王社取

又うね ちねも ちああみ 松と 意

小山田井山跡ハ志ウの
伊あり

志如ス小似 ちやをうて 意の里

お山田の山とより浦あは
おおをのそむ

おなつてさなるりり
まの里

勢逸き家

まあさふ又あつ川や
きき菜程

川の川

船くせをなううん
船のこ

舟のさ小川とこ
河田公

三月海の人家と世魚を
なてあさき

つよう三月浜なり
船の味

船の崎の名も時めよれ

ま苗とら人足おろさ
たをの松

柳は本堂唯

ま向うてあつ山名や
あつよあ

師本宮金

新白ふくね 桂下ハ日おそ死

藝壇ふて

畑や新ふくさなる山のけ

菘中

志ら主務やまこのる日ハ筆之於下

菘苗代

山中ウ小くる 湖あり 吾於川

七夕の口安藤山のふきこ
山の井をたつぬて

飲ふりいまつ流ひく 菘 硯

菘 標石

汗くハ三粒のこすゝあふこ 引

伴都久志あて

いつくや 澁王路く次けあうり

蓬草屋

雨ふるも船のきるおろり 蓬草屋

かえりて

讀あはるるふまつねや船の風

古川の歌ふ徳徳の橋の旧址あり
ま侍ふ幸ありうら柳のええりぬハ

これにても徳ええの橋ふちり 柳

まるち

ゆちや月も音うら 澄るる

お川ちよやうて

音列やきぬと流水の船のきめ

船風やうらハ糸の屋敷に

八月のちよめ
大石田まで

船船ふ一月はヤ 宮之川

明浦や風も誘はる 船のる

大坂坂岨を望む

飛鳥の川よよ休まほそわたりて 尾

言はね

鳴をぬてくく波瀬の月流

神は降るふいりて
あまの昔をしのぶ

象河の初てもきよしけのくそ

象河のきよきよあは

船うらりねのちひや 瀬流ち

酒田の初出まで

道海王帆をまゝり たり 各わたり

澄そりや 船の本まも ね 尾山

浦尾山

まき志力 けきう かり 入りやけ 言 伝

九月廿日 筆の屋 唯

あゝ 皇や さあ けり 皇の山

志保山中 皇御

穉めうぬ 皇御 新海や 皇の皇

米津 皇お 皇の 皇御

皇皇 皇の 皇御 皇の 皇御

松原 皇御

新海 皇や 皇御 皇の 皇御

皇の 皇御

皇の 皇御 皇の 皇御

皇の 皇御 皇の 皇御

皇の 皇御

皇の 皇御 皇の 皇御

皇の

干所 又久三 亥主 松原 月下 流江 府
深川 小松 葉原 の 宮 燈 此 寺 小 松 頭
これ を 志



